

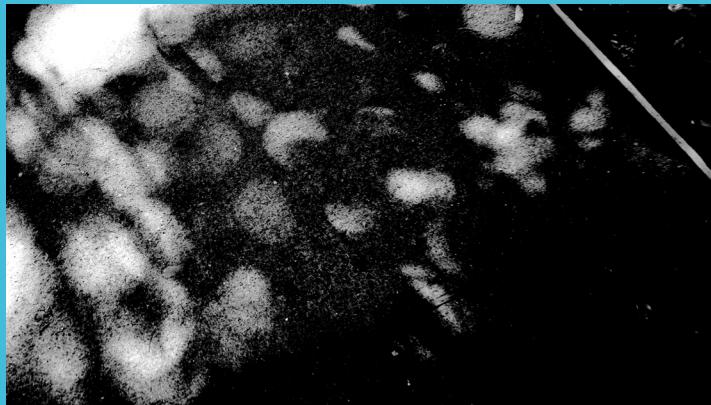
日常の風景



# まちでくギャラリー

#8 2014年11月～12月の展示

小笠原早織



高橋あい



11月と12月のマチでくギャラリーは、若い二

人の女性写真家の作品を展示します。

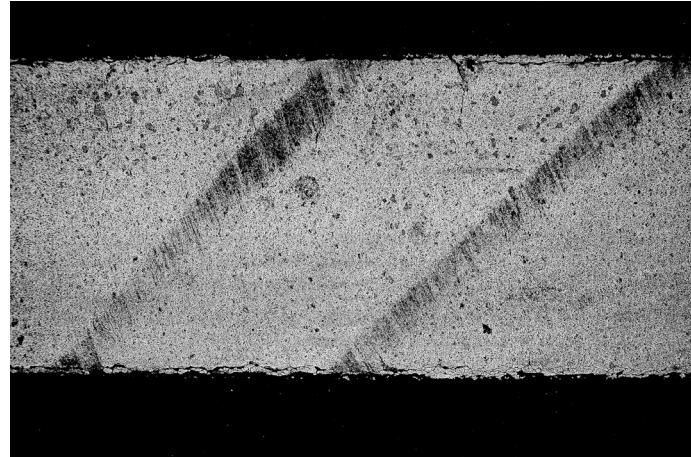
小笠原さんは現在東京で活動をしていますが、岩手の人で、何年か前の「アート＆クラフト土澤マーケット」で六つ切りの白黒写真を販売をしている時に出会いました。そして土澤商店街のあちこちに作品を展示してもらったことがあります。

やはりこの人も若い感性で、今の時代のものの見方を表している人だと思います。作品そのものと、それに付けられたタイトルを見てください。タイトルというものは、やはり作品を現す作者の感覚を端的に物語っている「詩」だと思います。

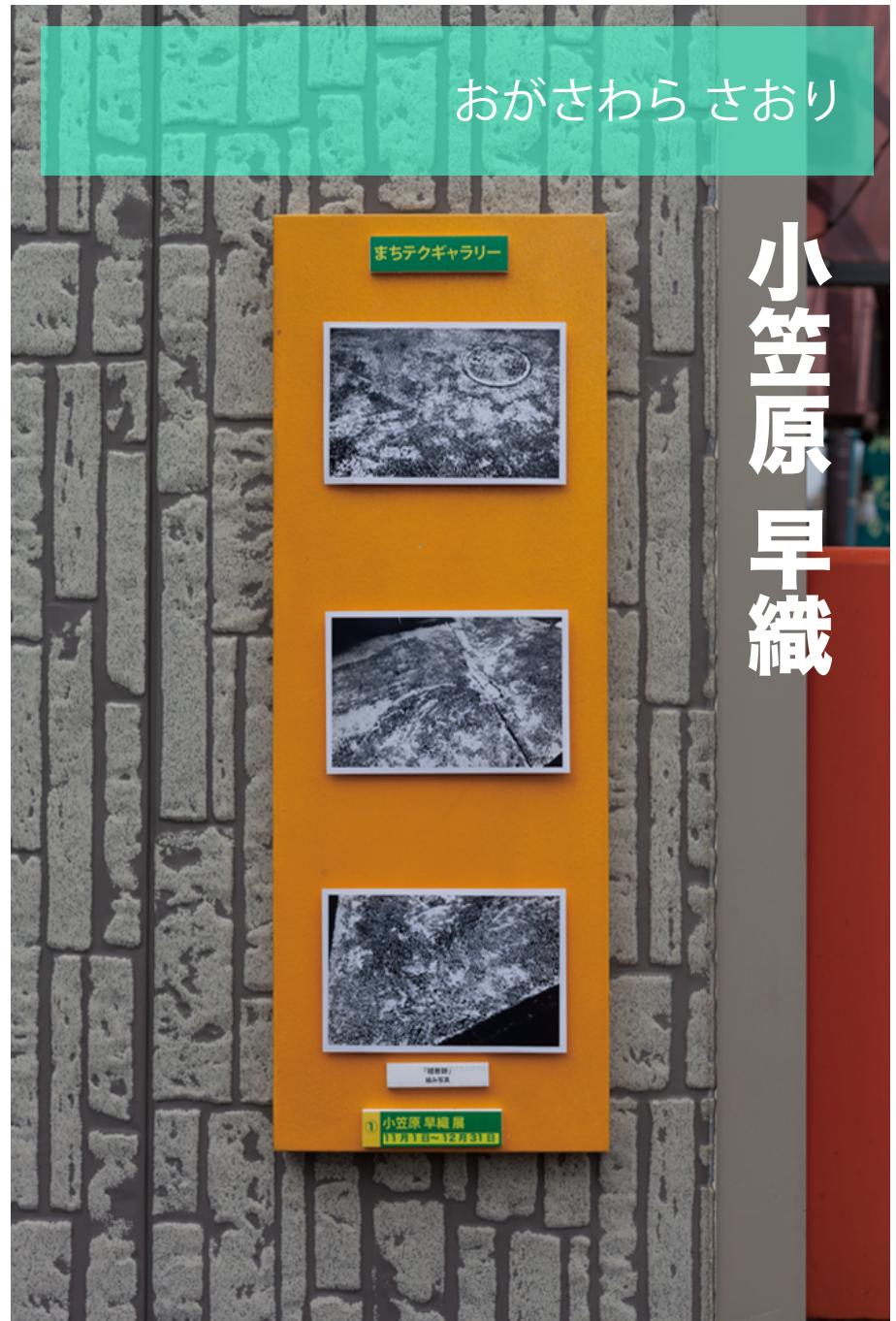
一方の高橋あいさんは、東京に生まれ、東京芸術大学大学院修了後、飛騨高山在住の写真家。彼女の写真には不思議な雰囲気に満たされた静寂があるように思います。しかしここで展示されたものは、いつもの写真とは違う、このまち、東和町の人々が提供してくれた、今と昔の自分の写真を「モンタージュ」のように「重に重ねて今と昔を同時に映し出しました。

時の流れが、いつの間にか現在を過去に流れさせて、思い出と今の螺旋を繰り返しながら徐々に積み上げる時間の軌跡を現しています。

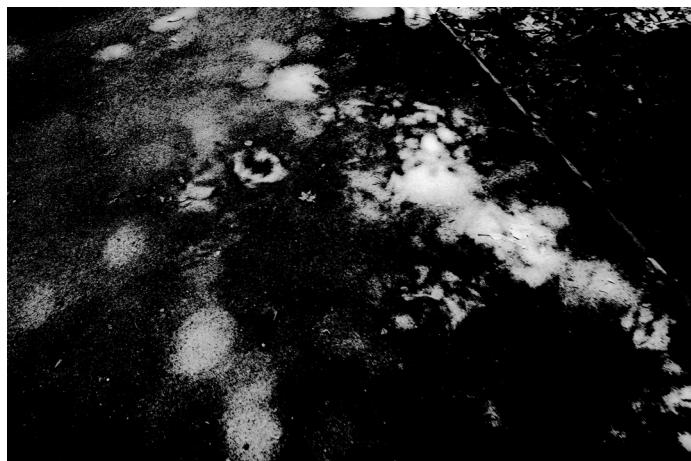
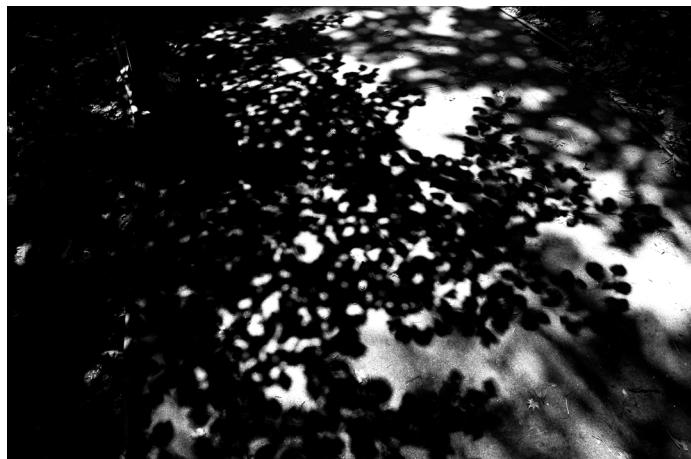




my abbey road.



土澤商店街 吉功仏具店脇



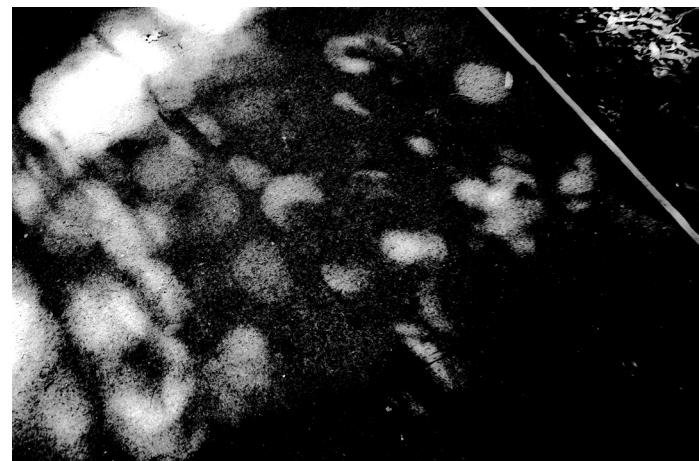
影ルヘン



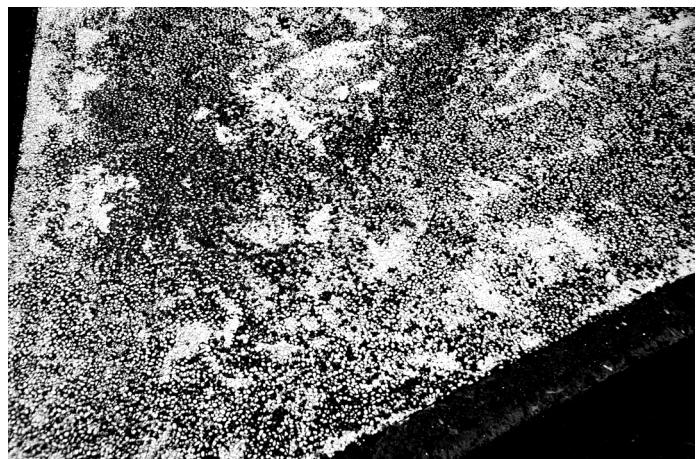
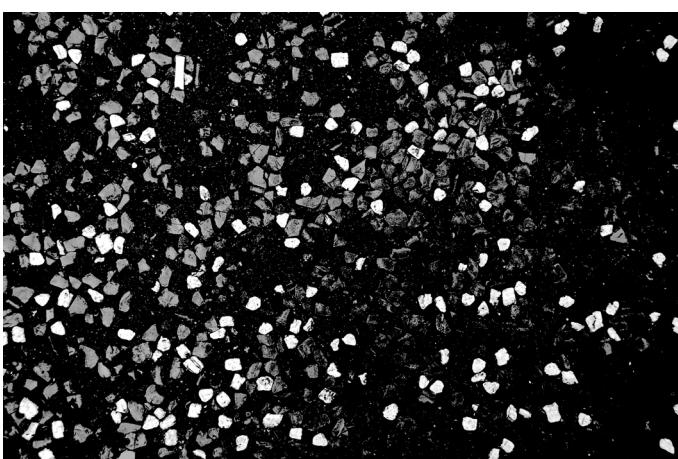
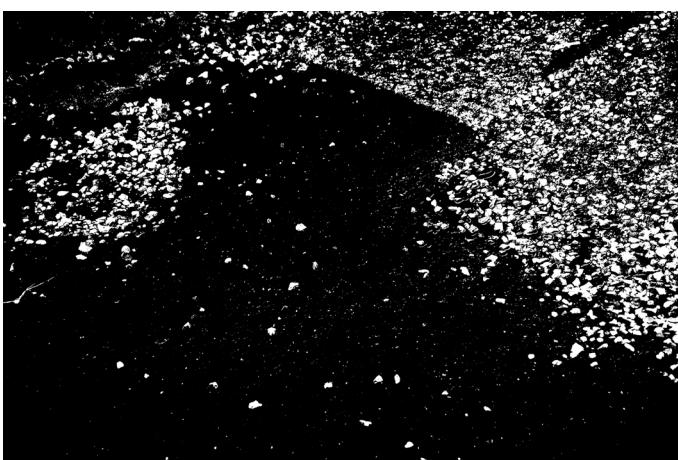
ハナ



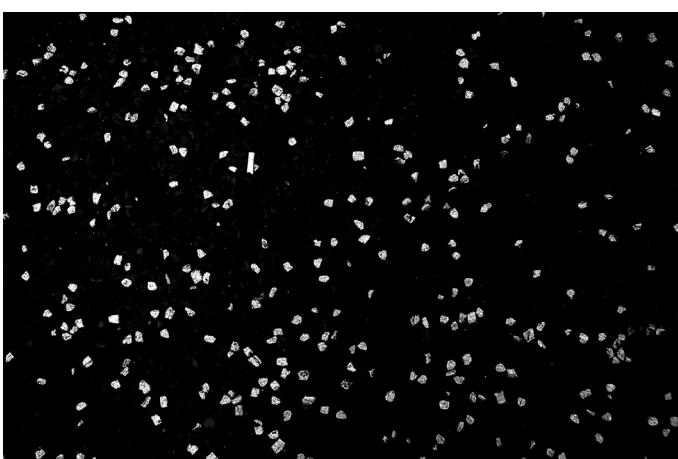
蠅



影ルヘン 2



積跡

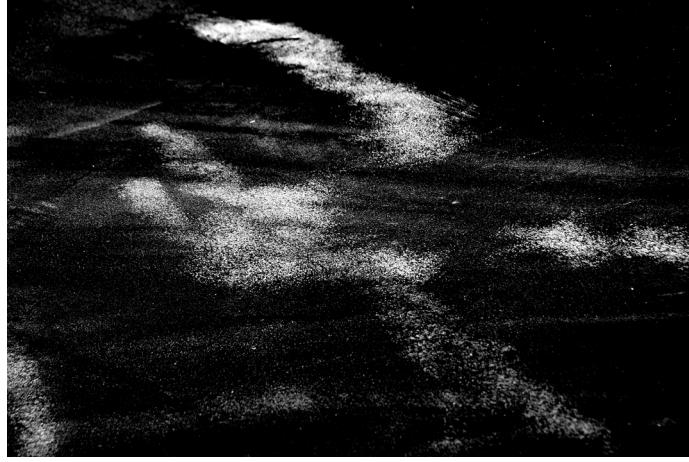


散ル



13

痛葉



粗路

12

たかはしあい

# 高橋あい



キセキ



土澤商店街 大塚宅（岡田新聞店）



キセキ



キセキ

## 写真の時間

私自身も写真を撮ることが好きで、子どものころからカメラを持っていたし、現像などもした時期もありました。だけど、自分の眼が露出計になるくらいにたくさん繰り返し撮影をするようなこともなく、単純に写真を撮ることが好きということでした。

最近では私のまわりでも写真作品を表現の方法として、写真とはなにかと、問いかけ表現そのものを考え直すような仕事にたくさん出会い、写真についても考える機会も増えてきました。

写真にしても絵画や彫刻にしろ、みんなにかを表現するためのひとつの方針にすぎないのでないだろうか、あたりまえのような話だけど、改めてそんなふうに考えることも最近増えたように感じます。

さらに、もしかして「表現すること」というのはそれが目的なのかもしれない。表現自体それが目的であり、同時に手段でもあるような気もするのです。あたりまえにやっているのだろう表現なのだけど、あたりまえだからこそ、本当のところが見えにくく、分かりにくい。

そしてさらに、何を表現しようとしているのか、それ自らも本当のところは分からぬまま世界を漂つていて。それでも表現が成り立ってしまう事実もあるでしょう。

少なくとも私の場合、結局は行く先もわからない不思議な表現丸という船に乗つてしまつていて。そんなところが実際です。

そんな私の個人的な表現についての疑問はともかく、い



キセキ



キセキ

や、それから容易には飛び出すこともできないでいるのですが、私が最近思つてることと重ね合わせて、書いてみます。

2014年11月と12月の土澤商店街のあちこち、22ヶ所に置かれた日常の芸術として展示をしている「マチでくギヤラリー」での高橋あいさんの作品について考えなればなりません。というか、感想を感想をこうして文章にすることと、改めて確認をしておきたいのです。

「キセキ」と題され、今回展示された一連の写真は2011年の「マチかど美術館」での高橋さんのワークショップからつくられた写真です。

そのワークショップは、過去と現在を写真で時間を引き寄せるという、写真のまつとも得意な作業とも言えるのでしよう。

1枚の印画紙の上に過去と現在を同時に載せて時間の不思議さを引き出そうというものだったと思います。

といって見れば誰にでもある、時間のキセキを現実にこうしてひとつ紙の上に再現することは、時間を具体的に形にして現すことだともいえます。過去の写真も、それほど前ではない過去の写真のどちらも実際の出来事だったので、それを一緒に紙の上に置くことで、その印象が強められる、ということでしょう。

それは当事者としても、見る側の人にとっても、被写体となっている、ふたつの時間の自分の姿を、時間の壁を越

えて、定着された画面は強く自分の時間というものを意識させられるのではないかでしょうか。

さらにそこに写っている地域の人たちにとつても、共有していた景色が、過去と現在の街のたたずまいが変わつていることを目の当たりにすることになります。

また全くの第三者の眼から見ても、そこに映し出されている風景の過去現在と未来までを想像すれば、時間の重さと後戻りができない現実の大きさにも思いがいたって、すっぱさを感じ取るだけではすまない時間の重さの不思議さになつてズシリとくるのではないかでしょうか。

「時間」、「時間」そして「時間」。

失った時間ではなくて、遠く近くに点在する時間の記憶は現在を飛び越えて、未来にもどこにでも直接、突き刺さるように変幻自在それこそワープを欲しいままで。

哀愁とか郷愁といった感情的なものも含めて、そのように時間を超越したイメージが自在に拡がるのも想像力の大好きな力なのではないでしょうか。

最初にも書いたように、私自身も写真を撮つたり見たりすることが好きで、今でも写真機はだいじな道具のひとつになっています。

写真を撮ることを通してものがどのように見えているのか、また人にとってどのように写っているのか、それらの感覚が写真を媒体にして感じられたりもします。考えたりすることが見て取れたりします。あるいは写真を撮ること



キセキ



キセキ

までにも面白さを感じているのだろうと思います。

今回のこの展示には高橋さん自身が撮影した写真は入っていないのですが、彼女の眼を通じて定着された写真には、それこそ時間が停止した、定着した時間の中で換えつて時間の広がりが感じられるような気がします。想像の空間が拡がる作用があるとでもいいたくなるような感じを受けます。

時間がとまると空間は変質してしまうんですね。

時空という言い方がありますが、空間だけで、あるいは時間だけで物事はなりたたず、時間と空間の両方がお互いに補完しあって成立するものだということが、写真の中に現れていると思います。

能の舞台で鼓の音がコーンと鋭く空間を切り裂き、音という時間が空間をコントロールするのにしていると思います。あるいは、蓮の花が水辺から伸びた茎の上に咲きはじめるとあたりの空気を支配してまるで時間がとまってしまったような感じがするのですが、それも時間と空間の関係を象徴しているような感じがします。

何かしらそのような時間と空間の関係が写真の画面の中にも存在するのではないかでしょうか。

単純にシャツタが時間を切り取るという物理的なことだけに由来していないと思うのです。

想像には空間を拡げる力があるとも思います。そこには、

不思議な光りと色が加わって来るような思いもします。

それはおそらく「光り」をどう考へているのかという差ではないだろうか。それは、光りを求めてそれを捉まえようという希求の違いではないだろうか、といつも思つてしまします。そのうえで高橋さんの場合はどうなんだろう。

23ページ、次の見開きに掲載した写真は現在、高橋さんが暮らしている飛騨の家で撮影したヒマワリの花ですが、この微妙な光りの移ろいにわたしは非常に驚きました。

写真に写る光りと眼に見えるそれとでは恐ろしくくらいに差があつて、しかも眼で見た時には対象にさまざまな思い入れという偏見を込めて見ててしまうので、実際の色や光りとはかけ離れた印象やイメージでゆがめられてしまいます。

写真家は、見えるものと写るものとの違いをさまざまなお法で捉えて、その差分を計算したわざを投入することで写真、作品を作るのでしよう。

そのことは、実は技術とかけ離れた経験と感覚とそれらを捉えて、アウトプットする意図が重要なのだと思いません。

アウトプットと大変におおまかな言葉で区切つてしまい

ましたが、写真はかなり技術的な要素を要求される度合いが本来強いかもしれません。

技術的な要素を充分に満たした上で、写真を撮る人、それぞれが光りと写ることの違いを考慮して、その日常が膨大に積み重なって多量の作品として蓄積しているのでしよう。

そうした日常こそが写真の時間となつて美しさを与えるのでしよう。

おそらく美術でも、写真や音楽もみなおなじように、表現することが目的であり、同時に手段でもあるのではないでしようか。

そこには時間がたくさん積み重なっているのです。

(菅沼綱)



ヒマワリ

「マチでくギャラリー」 #8  
2014年11月12月の展示  
小笠原 早織・高橋あい  
花巻市東和町土沢商店街 22 力所  
発行 東和町土沢商店会連絡会 2015年3月

企画・編集 toncacci atelier  
花巻市東和町田瀬 14-120  
代表 菅沼綠  
roqu@me.com

